

大連理工大学における日本語教育について

由 志 慎

〔寄稿論文〕

大連理工大学における日本語教育について

由 志 慎

要 旨

大連理工大学と群馬大学は2007年1月に協定校を締結した。両大学の交流の一環として、2009年から2012年までの4年間にわたり、大連理工大学から16名の学生を交換留学生として群馬大学に派遣した。この16名の交換留学生は専門が違い、日本語のレベルもそれぞれ違う。また留学経験もそれぞれ違う。本稿は大連理工大学における日本語教育の現状を紹介し、交換留学生にアンケート調査をもとに、今までの交換留学におけるニーズ、評価と問題を論じ、これからの両大学の交流、交換留学事業のあり方を検討するための基礎研究とすることを目的とする。

1. 大連理工大学の概要

大連理工大学は、1949年に創立された、中国教育部¹⁾ 直属の重点大学であり、理工系学部だけにとどまらず、経済、商学、中文、外文などの文科系学部も併せ持つ、総合大学である。2013年現在、各種在校生を40,300人あり、そのうち、全日制生は学部学生19,481人、修士課程学生9,383人、博士課程学生3,617人である。外国人留学生は630人で、韓国・日本からの留学生が多い。

23か国と地域の158の大学・研究機関と協定を結び、毎年交換留学生を140名位派遣している。大連という地縁が原因で日本の大学との交流が盛んで、日本語教育も充実している。

2. 大連理工大学における日本語教育の現状

2.1 日本語教育の概要

2.1.1 日本語教育機関

大連理工大学には日本語教育機関が2つある。本部キャンパスにある外国語学院日本語学部と開発区キャンパスのソフトウェア学院外国語部日本語研究室である。

2.1.2 日本語教員

日本語教員は全部で43名で、中国人教員が34名、日本人教員が9名となっている。外国語学院には

中国人教員が22名、日本人教員が9名所属している。下記の表1と表2のとおりである。ソフトウェア学院は中国人教員12名からなる。

中国人教員は、全員が修士以上の学位を持っている。外国語学院では、博士取得者と博士在籍者と修士取得者がそれぞれ1/3を占める。また、日本の大学で学位を取得したのは外国語学院では77%あり、ソフトウェア学院では33%ある。職名を見ると、両学院とも教授が少なく、講師が半分以上占める。年齢層は30代と40代が全体の80%以上占める。専門は言語学、文学、社会学、日本語教育などがある。一方、日本人教員はソフトウェア学院にはおらず、外国語学院には9名所属している。そのうち、一人がボランティアである。2012年前期までは60代以上の教員が半分以上を占め、高齢化が見られたが、2012年後期から20代と40代の日本語教育を専門にした若手教員が4名増え、高齢化問題が改善さ

表1 中国人教員の構成一覧(2013年1月データ)

カテゴリー	人数(%)	外国語学院 日本語学部	ソフトウェア学院外 国語部日本語研究室
	分類		
学歴から見る	博士取得	7 (32%)	1 (8%)
	博士在籍	8 (36%)	0
	修士取得	7 (32%)	11 (92%)
出身(博士在籍を含む)から見る	日本の大学	17 (77%)	4 (33%)
	中国の大学	5 (23%)	8 (67%)
職名から見る	教授	2 (9%)	1 (8%)
	准教授	7 (32%)	3 (25%)
	講師	13 (59%)	8 (67%)
年齢から見る	50代	3 (14%)	1 (8%)
	40代	7 (31%)	4 (34%)
	30代	12 (56%)	6 (50%)
	30以下	0 (0%)	1 (8%)
合計		22人	12人

表2 外国語学院の日本人教員の構成一覧(2013年1月データ)

年齢	属性	定員	ボランティア	計
70代		1	0	1
60代		1	1	2
50代		1	0	1
40代		2	0	2
20代		3	0	3
計		8	1	9

れた。

学習者は合計約2000名で、内訳は表3のとおりであるが、教員と学習者の比例は1：49で、日本語教員の授業は週に平均14時間と負担は大きく、教員が不足していることが見られる。

2.1.3 日本語学習者

大連理工大学の日本語学習者は学部生から院生まで、専攻・非専攻、そして初級から上級まで、数が多く、種類も豊富である。学部生から見ると、日本語専攻と日本語強化コースと一般教養の学生がおり、日本語専攻は毎年40名で、一年生から四年生まで全部160名である。日本語強化クラスは本部キャンパスでは毎年150名で、一年生から四年生までは全部で600名となっている。開発区キャンパスでは毎年300名で、一年生から二年生までは人数は本部キャンパスと同様600名が学んでいる。一般教養科目としての日本語授業に参加する学習者は第一外国語として勉強する学習者と第二外国語として勉強する学習者と日本語を副専攻として勉強する学習者、そして、ダブルディグリーとして勉強する学習者からなる。人数は合計540名位いる。院生の場合は日本語を研究するのは35名で、一般教養科目とし

表3 日本語学習者の一覧

学習者が受講する日本語教育機関	学 習 者 所 属	
外国語学院 日本語学部	学部 (1,430名)	日本語専攻 (40名*4年=160名)
		日本語強化クラス (150名*5年=750名)
		一般教養 (520名)
	院 生 (60名)	非専攻第一日本語 (10名*2年=20名)
		非専攻第二日本語 (140名*3クラス=420名)
		日本語補修班 (60名+20名=80名)
		日本語専攻 (35名)
院 生 (60名)	外国言語学及び応用言語学 (10名*3年=30名)	
	MTI (5名)	
	一般教養 (25名)	
修士クラス (15名)		
博士クラス (10名)		
ソフトウェア学院 外国語部 日本語研究室	学部生 (600名)	日本語強化クラス (30名*10クラス*2年=600名)

て勉強する学習者が25名いる。

表3に出されたほかに趣味、就職、留学、観光などを目的にして大学以外の日本語教育機関で学習する学習者もいるし、マンガやアニメにより日本語を学習する独学者もいる。また、両親の留学や仕事の関係で日本滞在経験者も近年は散見される。

これから上記のそれぞれの形で学習する日本語学習者の専攻、それぞれの日本語授業の到達目標、カリキュラム、成果と問題点について論じていく。院生は群馬大学の交換留学生の選抜対象外となっているので、本稿では院生を対象とする日本語授業については触れない。

2.2 日本語専攻

2.2.1 育成目標

大学全体の人材育成の目標は「高尚な道徳と責任感があり、幅広い知識基礎と総合素質があり、広い国際視野を持つ、各分野の専門人材のエリート」であるが、これに基づき日本語専攻の育成目標は「しっかりした言語の基礎と高度なコミュニケーション能力があり、幅広い知識と総合能力がある日本語人材の育成」とされている。

2.2.2 カリキュラム

上述の育成目標を実現するために、表4のとおりカリキュラムが編成された。一般教養科目は思想政治・英語・計算機・高等数学などがあり、全体の22%を占め、専攻科目においては、技能中心の基礎科目と言語学・文学に関する科目、社会文化に関する科目、就職につながるビジネス関係の科目と

表4 日本語専攻の日本語科目一覧

	科目名	科目属性	1年目		2年目			3年目			4年目		計
			秋	春	夏	秋	春	夏	秋	春	夏	秋	
技能中心の科目	発音	必修	1.5										1.5
	総合	必修	6.5	9		6	6		4	4		4	39.5
	聴解	必修 選択	2.5	4		4	4		2	2			18.5
	会話	必修	2.5	4		4	4						14.5
	読解	必修					2		2				4
言語・文学に関する科目	作文	必修				2		2					4
	言語学概論	必修							2				2
	文法	必修						3					3
	日本文学	必修							3		2		5
	翻訳	必修						2	2				4
	通訳	選択							2		2		4
社会文化に関する科目	同時通訳	選択									2		2
	日本語新聞読解	選択							2				2
	日本事情	必修					2						2
	日本史	選択				1.5							1.5
	日本文化	選択						1.5					1.5
	中国文化(日本語)	必修									2		2
ビジネス関係の科目	異文化コミュニケーション	選択						1.5					1.5
	社会言語学	選択									1.5		1.5
	ビジネス会話	選択		1.5				1.5					1.5
	ビジネス文書	選択				1		1					1
ゼミナール	日本経済概論	選択		1				1					1
	日本語企業経営学	選択									1.5		1.5
	言語学	選択									1		1
	中日・日中翻訳	選択									1		1
実習	日本社会・文化	選択									1		1
	日本文学	選択									1		1
	通訳	必修										2	2
卒業論	翻訳	必修									2		2
	論文作成指導	選択									1		1
卒	卒業論文	必修										9	9
	卒業論文	必修										9	9
	「第二教室」活動 ²⁾	選択			0.5 ~1			0.5 ~1			0.5 ~1		2
	計		必修科目は109単位 ³⁾ 、選択科目は10単位が必須										136.5

(2008年大連理工大学学部生カリキュラムによる)

実習・さらにゼミナールと卒業論文、また第二教室といった課外活動など、種類多くの日本語の科目が設定された。

技能を中心とする科目の単位数は82単位で、日本語科目の全体の60%を占める。1、2年目に技能を中心とする科目で、「どのように日本語を話すか」という問題を解決することである。3、4年目は「日本語で何を話すか」という主旨で、日本語で言語・文学・ビジネスなどの専門知識を身に付ける。

また、技能を中心とする科目でも、技能を高めるだけでなく、学習者の中身を充実させるために、日本語学部の教員全員で作った内容重視のオリジナル教材⁴⁾を使う。言葉を習得する時、日本の文化や社会への理解を深めることができるよう、理工系大学の特色を出すための理工系専門用語も勉強できるよう配慮されている。

日本の大学で出身した教員が多く、学習者中心とするコミュニケーション能力の育成を教育理念とする教員が少なくはない。授業に導入された協働学習、自律学習も徐々に学習者に認められるようになっていく。

2.2.3 国際交流

日本の大学との交流が盛んである。学生の長期留学と短期留学のほかに、教師レベルの共同研究も行われている。毎年10名位が交換留学に行き、留学先は10校位ある。短期留学先は2大学で、10日か2週間程度日本の大学へ交流に行く。そして、毎年9月この2大学から短期留学生在が交流に来る。このほかに、日本の大学で集中講義を受け、単位を取得するという単位交換制度も導入された。

2.2.4 成果と問題点

上述のようなさまざまな教育実践の成果としては、下記のもの挙げられる。

- (1) 大学入学時に日本語をゼロから始めるが、3年次に大部分の学生が日本語能力試験N1レベルに達し、卒業までの合格率はほぼ100%である。
- (2) 作文コンクールやスピーチコンテストでよい成績を収めている。
- (3) 対外交流時、高く評価される。
- (4) 実習時、企業からの高い評価を受ける。
- (5) 就職率が高い。進路については毎年若干違うが、近年日本へ進学する者が増える傾向にある。

2012年の32名の卒業生の進路を例にして説明すると、進学と就職が半々となった。進学は3名が中国の大学院に入学したほかに、卒業後すぐ日本の大学院に入学したり研究生として大学院への受験勉強をしたりする者が10名位いる。就職先は中国国内の日系企業などがほとんどである。国家公務員になった者が1人いる。

問題点としては、学習者のモチベーションが第一に挙げられる。日本語学科の学生は半分が文系生で、半分が理系生である。文系の学生はほとんどが第一志望で入学するが、理系の学生で第一、第二志望で入学する者はほぼおらず、大連理工大学に入れれば、何の専攻でもいいと思う新生が少なくない。だが、理工大の日本語という学科に回されたことを意外に思う者も多い。そして、中日の歴史問題、領土問題もあるので、日本と日本人に敵意を持つ学習者が多い。これらの学習者の日本語学習

のモチベーションをどのようにして上げるのが課題となっている。

2.3 日本語強化班

2.3.1 設立背景

20世紀80年代、中国の改革開放に伴い、技術がわかる外国語人材、いわゆる「専門+外国語」という複合型人才が求められるようになった。大連理工大学はこれを背景に1987年に中国で最初に「専門+日本語」という複合型人才を育てることを目的に、機械工学部で「機械+日本語」という日本語強化班を設けた。設立当初、一年次ほかの科目なしで日本語教育を強化することで、日本語専攻や非専攻の第一外国語としての日本語教育と区別するために、「日本語強化班」と名付けられたのである。

1992年から毎年30名~90名の卒業生があり、中国国内にある日系企業に就職したり、日本に行っても就職したりしている。技術がわかる日本語人材なので、社会に出て評価され、日本の企業でも活躍している。1990年以降、大連を中心とする多くの大学では「専門+日本語」、「日本語+専門」の人材育成モデルが導入された。東北财经大学では「会計+日本語」、大連医科大学では「漢方薬+日本語」、大連大学では「機械+日本語」などの日本語強化班を設立した。大連理工大学もニーズに応じて、日本語で講義できる専門教師を集め、その上で、「計算機+日本語」、「材料+日本語」という強化班を増設した。

2.3.2 概要

日本語強化班は本部キャンパスにも開発区キャンパスにもある。本部キャンパスは主専攻が機械・材料・計算機で、五年制で、毎年150名の新生がいる。日本語履修単位は79.5と要求され、全体科目の37%を占める。日本語教育の到達目標は日本語能力試験のN1レベルとされる。これに対し、開発区キャンパスの方は四年制で、主専攻は計算機だけで、毎年300名という多数の新生が入学する。日本語履修単位は37.5で、全体科目の21%しか占めない。日本語教育の到達目標は日本語能力試験のN2レベルとされる。

表5 日本語強化班における専攻別の相関データ（2012年1月データ）

キャンパス	所属する学部	主専攻	設立年	在学 年 数	ク ラ ス 数 ／ 年	人 数 ／ 年	到日本 語教育 目標の	日 本 語 履 修 単 位 (全 体 に 占 め る %)
本部キャンパス	機 械 工 学 部	機械製造設計	1987年	5年	2	60	N1	79.5(37%)
	材 料 工 学 部	金属材料学	2007年	5年	1	30	N1	79.5(37%)
	計 算 機 科 学 部	計算機科学	2008年	5年	2	60	N1	79.5(37%)
開発区キャンパス	ソフトウェア学院	計算機科学	2002年	4年	10	300	N2	37.5(21%)

主専攻の科目は中国語で講義するのが大部分であるが、三年次から日本語の教材を使用し、バイリンガル（日本語+中国語）で講義するものもある。また、大学の国際化の発展にしたがって、教師間の

共同研究の成果として、日本の大学から教授を招聘し、日本語のみで特別講義や集中講義を実施する試みも行っている。

2.3.3 「機械+日本語」日本語強化班の育成目標

「機械+日本語」という日本語強化班の育成目標を例として挙げる。

高い日本語能力を持ち、機械設計製造基礎知識と応用能力があり、機械製品設計、製造、科学技術開発、応用研究、マネジメントと営業などの仕事ができる、高級技術人材を養成することを目標とする。

日本語教育を強化するほかに、主に機械設計と製造に関する基礎理論を勉強する。マイクロ電子技術、計算機技術、情報処理などの技術に関する基本知識を勉強し、現代的な機械エンジニアの基本トレーニングを受け、機械製品設計、製造と設備制御、生産管理の基本能力を持つ。

2.3.4 カリキュラムの見直しと再編成

社会の日本語人材に対するニーズの変化に応じて、カリキュラムが再編成された。旧カリキュラム（1987年日本語強化班が設立させた時に組まれた）と新カリキュラム（2008年に再編成された）における日本語科目一覧は下記のとおりである。

表6 本部キャンパスの日本語強化班の旧カリキュラムにおける日本語科目一覧

カテゴリー	科目名	学期 科目 属性	1年目		2年目		3年目		4年目		計
			秋 学期	春 学期	秋 学期	春 学期	秋 学期	春 学期	秋 学期	春 学期	
技能中心	日本語精読	必修	6.5	10	6	6	4	2.5			35
	日本語視聴	必修	3	5	5	4	4	4			25
	日本語会話	必修	3	5	3.5	3.5	4	4			23
	日本語選読及び作文	必修							4	4	8
計			12.5	20	14.5	13.5	12	10.5	4	4	91

(2003年大連理工大学学部生カリキュラムによる)

表7 本部キャンパスの日本語強化班の新カリキュラムにおける日本語科目一覧

カテゴリー	科目名	学期 科目 属性	1年目			2年目			3年目			4年目		計
			秋 学期	春 学期	夏 学期	秋 学期	春 学期	夏 学期	秋 学期	春 学期	夏 学期	秋 学期	春 学期	
技能中心	総合日本語	必修	6.5	9		6	6		4	4				35.5
	日本語視聴	必修	2.5	4		4	4							14.5
	日本語口語	必修	2.5	4		4	4							14.5
	上級日本語視聴及び会話	選択							4	4				8
	日本語選読及び作文	必修										4	4	8
専門日本語	機械・材料・計算機日本語	必修										2		2
ビジネス関係	ビジネス日本語会話	選択										1.5		1.5
	ビジネスマナー	選択											1.5	1.5
	ビジネス日本語文書	選択											1	1
日本文化	日本概況	選択					2							2
「第二教室」活動		選択			0.5 ~1			0.5 ~1				0.5 ~1		2
合計			必修科目は74.5単位、選択科目は5単位が必須										79.5	

(2008年大連理工大学学部生カリキュラムによる)

学習者に自由な時間を与え、好きな勉強をさせるという大学指針に基づき、単位数は元の91単位から79.5単位となり、12%減少した。このうち必修科目の単位数は合計74.5である。ほかの選択科目は合計14単位であるが、このうち3.5単位の履修が義務付けられる。「第二教室」活動は日本語専攻と同じで2単位の履修が必要である。合計79.5単位の履修になる。もともと必修科目だけであったが、新カリキュラムに選択科目が設けられた。これは、学生に興味がある勉強を選ぶチャンスを与える意図で行われている。また、科目数も元の4科目から11科目に増えた。技能中心の科目の履修単位数が調整され、また、専門日本語・ビジネス日本語・日本文化というカテゴリーの科目も増設された。豊かな心と知識を持つ学生を育てるのがその目的である。

2008年にカリキュラムを再編成する際、卒業生に半構造インタビューを実施した。大学時代に勉強したらよかったと思うのは何かと聞いたところ、「日本事情と日本の文化について勉強したかった」という解答が多かった。技能中心の授業で日本語の運用能力を身に付けたが、日本人同僚とコミュニケーションする時、話の種がなかったり、同僚が触れた日本の文化について聞いてもわからなくてこまっているということである。また、日本の企業に就職してから、カルチャーショックを感じ、日本人の考え方、やり方、習慣がわからないので、それによって起こるトラブルが多いと言った学生もいる。そして、日本企業のマナーとかの勉強が必要だとの声も聞かれた。これらの意見を元に、ビジネス日本語と日本文化というカテゴリーの科目が増設された。また、卒業してからすぐ就職せず日本の大学院に進学したり、企業の開発部に就職したりする学生がいる。このような学生には、専門の文献を読む力と専門分野でプレゼンテーションする力などが求められ、専門日本語の科目も設けられた。

これに対し、ソフトウェア学院の日本語強化班は日本語科目が単位数も少なく、種類も単純で、しかも技能を中心とする科目だけである。

表8 開発区キャンパスの日本語強化班の日本語科目一覧

カテゴリー	科目名	学期 科目 属 性	1年目		2年目		計
			秋学期	春学期	秋学期	春学期	
技能中心	総合日本語	必修	4.5	6	6	6	22.5
	日本語視聴及び会話	必修	3	4	4	4	15
計			7.5	10	10	10	37.5

(2012年大連理工大学学部生カリキュラムによる)

2.3.5 成果と問題点

本部キャンパスは3年次に日本語能力試験N1レベルに達する者が半数で、卒業までの合格率は約90%である。進路については、就職が大部分である。就職率は企業と学生が10:1で、大連理工大学で毎年最も早い時期に就職が決まる。就職先は日本にある大手企業や中国国内の北京・上海・広州・シンセン・大連にある日系企業である。管理者や技術者として自動車・機械製造・ITなどの分野で活躍している。進学者数は年々増える一方であるが、ほとんどが日本語の大学院に留学する。問題点と

しては能力に個人差があり、バラつきが大きいことが挙げられる。卒業時相当なコミュニケーション能力がある学習者もいるし、全然コミュニケーションがとれない学習者もいる。

一方、ソフトウェア学院の日本語強化班は2年次の後期に日本語能力試験N2レベルに達するのが60%で、卒業までの合格率は約80%である。進路については、ほとんどが就職する。中国国内のIT企業に就職する場合が大多数である。問題点は、N2合格率は高いが、コミュニケーション能力が低いことである。

2.4 非専攻第一外国語

原則として中等教育で学習した日本語を継続して履修する必修科目で、シラバスで定められた中国国家4級試験(CJT)の合格が学位取得の条件となっていたが、必須条件でなくなった今でもCJTを受験する。

第一外国語の履修者数は中等教育での実施状況を反映しており、英語が大多数を占め、日本語、ロシア語の順になっているが、中等教育の学習者の減少で日本語を第一外国語とする学生も年々少なくなっている。毎年10名程度の新生がいる。

日本語の授業は12単位で、1年目と2年目に履修する。到達目標は読解・文法が日本語能力試験N2程度で、聴解・作文は同N3程度である。

少人数だが、学習者のバラつきが大きい。それぞれの学習者のレベル・具体的な事情に応じ、授業内容と教授法・運営の仕方が工夫される。例えば、2011年度の秋学期では、科学技術論文とレポートの書き方といった共通のテーマを用い、その書き方や様式などについて理解させた上、実際に授業後書かれたレポートなどを授業中に発表させる実践の試みをした。日本語を通じて違う専攻分野の語彙や知識に触れさせ、視野を広げられるのは意味がある試みだと言えよう。

2.5 非専攻第二外国語

各学部の第一外国語での英語履修者を対象に開設された選択科目で、履修単位は8単位で、2学期に分けられる。

学習目的はアニメ・マンガに関する知識や観光などの趣味と、将来の就職や留学という実利主義と単位取得に大きく分けられる。

文法教育が中心で、到達目標は日本語能力試験のN3である。

問題点は多人数授業を如何に運営するかということである。最初の時、一つのクラスに140人もいる。人数が徐々に減り、期末試験の時、2/3しか残らないのが普通である。これからは教師不足が原因で作られた大規模授業という構造に問題があるのだが、教師をすぐに増やすことは難しい。そこで、学習者同士のピアラーニングの実施やネット教育の導入が必要だと考えられる。

2.6 日本語補修班

学習者の要望に応じ、2005年9月に各学部生の希望者を対象にし、日本語を副専攻として履修する「日本語補修班」が開設された。

31単位の履修が要求され、到達目標は日本語能力試験のN2と設定された。日本語の授業は下記のとおりとなっている。

表9 日本語補修班の日本語科目一覧

科目名	学期 科目 属性	1年目		2年目		3年目	計
		春学期	秋学期	春学期	秋学期	秋学期	
基礎日本語	必修	7	6				13
中級日本語	必修			5	5		10
日本語視聴及び会話	必修			4	4		8
計		7	8	9	9		31

(2010年大連理工大学学部生カリキュラムによる)

技能養成を中心とする授業だが、平日の18時以降と土日の時間帯に行われるため、途中で抜けたりする学生が少なくはない。卒業する時は当初の半分しか残らないことがよくある。

3. 群馬大学へ派遣された交換留学生

3.1 交換留学生の選抜

大連理工大学交換留学先は日本・台湾・韓国と欧米の大学である。そのうち、日本の20の大学へは毎年全体の1/3占める50名位を派遣している。

毎年の9月～10月に選抜が行われる。申込み→書類審査→筆記試験(日本語か英語)→面接試験(中国語と日本語か英語)という流れである。申込者は大連理工大学の在校生であればいい。申込み時に希望する大学を一つ選ばなければならない。書類審査では今までの成績や留学理由などを考察する。筆記試験は日本語試験と英語試験があるが、希望する大学が要求する言語能力を考察する試験である。留学先の大学によって要求が若干違う。日本語力か英語力があればいいと要求する大学は多いし、日本語と英語の両言語能力を要求する大学もある。日本語の筆記試験は語彙・文法・読解・作文などの問題があり、日本語能力試験N2に相当するレベルの試験問題である。筆記試験に合格した者は面接試験を受ける資格がある。面接は中国語と外国語で違う試験官によって2回行われる。中国語での面接は主に性格・留学適応性などを考察し、外国語での試験は主に言語能力から留学適応性を考察する。選抜試験の成績は筆記30%と中国語での面接40%と外国語での面接30%からなっているが、この試験の成績で合格者が選抜される。もし、枠にまだ余裕がある場合、選抜で落ちた申込者に留学の意志を確認し、その上で全体調整を行う。

3.2 群馬大学へ派遣された交換留学生の人数と所属

2009年に群馬大学へ交換留学生を派遣し始めてから、4年間実施されてきた。全部で16人いて、日本語専攻と日本語強化班の学生がメインである。内訳は表10の通りである。

表10 群馬大学へ派遣した交換留学生

留学年度	学部別の人数		合計
	日本語専攻	工学部	
2009年度	1	4	5
2010年度	1	4	5
2011年度	2	1	3
2012年度	2	1	3
計	6	10	16

3.3 今までの交換留学におけるニーズ、評価と問題

3.3.1 アンケート調査

本稿では2012年2月末と2013年1月に2回、群馬大学の交換留学をした学生を11人に対象にアンケート調査をした。

調査方法は11人に調査表に記入してもらい、またそのうちの3人に聞き取り調査をした。

調査内容は交換留学におけるニーズ、評価、問題点などである。

3.3.2 調査結果

調査結果はそれぞれ下記の通りである。

(1) 留学へのニーズについて

「日本社会と文化の体験」、「日本語力の向上」、「専門の勉強ができる」、「大学院進学のための準備」が挙げられた。

(2) 群馬大学を選んだ理由について

- ・有名な大学で、北関東にある国立大学で、関西の大学より東京からそんなに離れていないから。
- ・群馬は物価が安いと聞いたから。
- ・中国人留学生がほかの協定校より少なく、日本語と英語で留学生生活を過ごしたかったから。
- ・日本語専攻生として肌で日本の文化を感じ、日本語力を向上させたかった。
- ・半年留学できるので、卒業時間を延ばさなくてもいいから。
- ・先輩の評価がよかったから。
- ・枠が相対的に多くて、他の大学より合格できそうだったから。

(3) 日本語教育についてよかったところ

- ・日本語の先生はやさしかった。
- ・『時事日本語』で自分が時事ニュースを選んで、知識と時事の勉強を結ぶことができるので、

一石二鳥だった。

- もっと日本語らしい日本語を話せるようになった。
- 多様な文法表現を自然に覚えてきた。
- 日本人の礼儀と挨拶や日本文化を本よりもっと体験できた。
- プレゼン能力はだいぶ上がった。
- 小学校へ行って自分の国の文化についてのスピーチを通して、スピーチ能力と口頭表現能力が向上した。
- アルバイトを通して、正しい敬語の使い方を身に付け、日本語表現も日本人と近くなり、勉強になった。
- 日本語授業は大連理工大学より内容がやさしかったが、日本語教師とメールのやりとりを通して、メールのやりかたなど日本の文化などがわかったし、日本語表現も上手になったと感じた。
- 作文、会話と日本事情などの授業は大変よかった。レポートの書き方、プレゼンの方法、メールのやり取りの方法などを身に付けて、収穫があった。

(4) 日本語教育について気付いたところ

- 毎日授業が多くて、予習・復習できず、充分消化できない。
- 大学の授業とアパートでの生活は会話能力の向上にはあまりつながらない。
- 書道などを開講しない学期にいたので、受けることができず、残念だった。
- 一般教養の授業と留学生の授業がぶつかり、両方取ることができなかった。
- 日本人の学生との交流が少なかった。
- 聞く能力はだいぶ付いたが、話す能力はあまり伸びなかった。
- 留学生センターの授業は少し簡単で、非常に精力的に勉強しなくてもいいという感じがする。
- J 5 の会話授業は教材もやり方も似ている。母校の日本人教員の授業と同じ感じだった。

(5) 専門教育についてよかったところ

日本語専攻生は「日本語以外に専門の勉強ができて、うれしかった」とか「一年生から四年生までの授業が選択できるので、視野が広がった」という声があったが、工学部の学生は「先生の研究室で実験をしていろいろ勉強できた」、「先生の研究分野が少し理解できた」という声も聞こえた。

(6) 専門教育について気付いたところ

- 授業登録は一週目か二週目で締め切りであるが、最初の時は大学にまだ慣れていなかったため、授業登録は勘で適当にやるしかなかった。学部生からアドバイスをもらえばありがたいなあと思った。
- 秋学期に来たので、専門の授業は逆の順で履修した。例えば、【機械システム設計】の学生は4月から留学はできないのか？
- 同じゼミの日本人学生とあまり交流しなかった。(2009年、工学部)

- ・材料関係の科目が少なかった。(2010年、工学部)

(7) ビザ・入学手続きについて

- ・案内が詳しくてわかりやすかった。
- ・対応が早かった。
- ・国際交流課の方がやさしくて親切で、なんでも手配してください、感動した。

(8) 生活について

国際交流会館の便利さと食堂の美味しさが評価されたが、「群馬の風が強くて、自転車での通学は大変だった」とか「バス代が高かった」とか「留学生会館の費用は会館費と公益費があり、支払いは別々で不便だった」とか「センターから群馬の地図か路線図をいただければありがたかったが」という意見もあった。

3.3.3 考察

11人の調査協力者が全員半年か一年の交換留学に対して「収穫があった」、「よかった」と評価した。それは留学ニーズに応じたからだと考えられる。半年留学でも一年留学でももっといたかったというのも聞こえた。皆、充実した留学生生活を過ごしたと言えるであろう。

日本語教育については、全体的によい評価を与えている。日本語の授業では言語能力が向上しただけでなく、メール・レポート・プレゼンの方法を身に付け、日本の文化に対する理解も深まったと考えている。また、日本文化に関する授業は技能の授業より更に評価された。しかし、学習者の日本語能力に応じた授業を開講する必要性も見られる。特に上級レベルの学習者を対象にする日本語授業の増設が必要であろう。

専門教育については、自分の専攻に合う授業がなく、仕方なく他の専攻の授業を履修した事例があった。一方、ほかの専攻の科目を履修するために、群馬大学を希望したのもいて、いろいろな専攻の知識を身に付けたことで満足した者もいる。また、秋学期に留学にした学生にとって、日本の大学の下半期に当るので、逆順で科目を履修した場合があった。ほかに、授業登録の時、アドバイスが欲しかった声もあった。生活面の支援だけでなく、勉強面の支援の必要性が見られる。

生活においては、手続きの協力、レンタル自転車、国際交流会館、食堂などが評価された。群馬の強い風と高価なバス代は大学では対応できないものであろうが、群馬のバス路線図の提供を求める声が聞かれた。今後、この報告をきっかけにして改善されていけば、留学生にとって更に魅力ある留学先になるであろう。

4. 今後の交流展開

5年間の実践経験を踏まえ、今後の交換留学生事業へ提案したい。

- (1) 今まででは交換留学と言うものの、一方通行の感は否めない。お互いに留学生を派遣し、受入れ合うことこそが本当の意味の交換留学になるだろう。大連理工大学においては留学に行く学生は

毎年140人しかおらず、全体のほんのわずかである。協定校の留学生をたくさん取り入れ、キャンパスに新鮮な血液を注ぐことが大学の国際化に役立つと考えられる。一方、群馬大学においては留学生を受け入れるだけでなく、在校生を海外に派遣し、「可愛い子に旅をさせよ」といったように、経済的に発展の余地の大きい中国で留学を体験させることは将来に役立つであろう。

- (2) いままでは半年か一年の長期留学だったが、これから1週間か2週間の両大学の短期留学が実施されれば、交流の多様化につながると思われる。長期留学における経験を活かし、これからの短期留学では、留学先大学で集中講義を受けた場合、単位を取得し派遣側の大学に持ち帰っても認められるという形を考えていく必要がある。このような単位交換への展開の検討が進めばより多くの学生が交換留学を希望するものと思われる。
- (3) 派遣側としての大連理工大学では留学経験の共有ができるネットワークを作ることが必要である。毎年違う学年、違う学科の学生が派遣される。しかも、先輩と後輩は群馬大学で会うことはできず、知らない人同士のままである。ネットワークがあれば、後輩が申し込み段階では希望する留学先の大学の後輩からいろいろ教えてもらったりすることができ、知らないまま留学先を選ぶより目的がはっきりして、失敗するケースが少なくなるだろう。また、選抜試験を改善し、より留学先に似合う学生を選抜することが課題となっている。
- (4) 留学生のアンケート調査の結果から見ると、受け入れ側の群馬大学では、留学期間・時期の多様化と、日本人学生との交流の強化が求められている。留学期間は半年と一年だけではなく、3か月、9ヶ月、或いは一年半などのさまざまな期間を設ける必要がある。留学時期においては、10月以外にも、4月に行ける制度を導入してもよい。そして、留学生が日本人学生と自由に交流できる土台を作り、留学生と日本人学生の交流の強化していくことが必要だと思われる。

参考文献

- 李 篠平(2003)『理工系大学生のための日本語教育におけるチャレンジ—中国大連理工大学日本語強化班の事例—』『専門日本語教育研究』5 専門日本語教育研究会 pp.3-8
- 孫 成志(2012)「理工系大学における日本語教育の実践—中国・大連理工大学を事例として」『日本語講座年報』第9号 pp.54-59 大阪大学外国語学部日本語専攻
- 李 筱平・范 苓(2009)「关于企业所需日语专业人才能力的实证研究」大連理工大学学报(社会科学版)第30卷第2期, 89-93
- 日本国際交流基金(2011)『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年 概要』凡人社
- 大連理工大学教務処(2003)「大連理工大学本科培养计划」
- 大連理工大学教務処(2008)「大連理工大学本科培养计划」
- 大連理工大学教務処(2010)「大連理工大学本科培养计划」
- 大連理工大学教務処(2012)「大連理工大学本科培养计划」

注

- 1) 日本の文部科学省に当たる

- 2) 日本語学習のリソースが限られている海外における日本語教育の学習環境デザインの提案に「第二教室」活動の試みを始め、敢えてカリキュラムにこれを受け加えたものである。課外活動と考えてよいが、単位履修が必要である。学習者の提案で日本語朗読・日本語歌唱・ものまね・アフレコ・演劇・スピーチ・ディベート・日本語クイズ・文学作品鑑賞・中日大学生交流・日本文化体験などの多様な活動が設けられた。
- 3) 大連理工大学は単位制度、四年制の学部生は175単位、五年制の学部生は215単位が卒業する必須条件となっている。1単位は16時間で換算する。
- 4) 大連理工大学教育改革プロジェクト基金の支援で、外国語学院日本語学部は2006年から2012年まで学部を挙げて『新総合日本語』という教材を作成した。『新総合日本語・基礎日本語』1－4冊、『新総合日本語・聴解日本語』1－4冊、『新総合日本語・会話日本語』1－4冊、『高級日本語』1－4冊からなっている。2008年から5年間にわたり大連理工大学出版社により出版されている。